

木のストローから生まれるもの

～なぜ住宅会社がストローをつくる？ 反対や失敗を乗り越えた根性の開発実話～

「木のストロー」は、木材の製材の熟練の象徴である“鉋掛け”による薄削りをヒントに、木材を薄くスライスしたものを斜めに巻き上げて加工したもので、この手法による木のストローの開発や量産化は世界初の取り組みです。この取り組みの発案者であるアキュラホームの西口彩乃様をお招きし、「木のストロー」の製品に至るまでの開発実話についてご講演いただきました。

開催日時：2022年2月8日（火） 15:00～16:30
参加者：50名



西口彩乃氏
株式会社アキュラホーム
SDGs推進室 室長 広報課 主任
ウッドストロープロジェクト
奈良県生駒市 SDGsアンバサダー

■あいさつ

今日は、なぜ住宅会社がストローを作ったのかということについて、私自身も結構尋ねられることがありますし、1年少し前に本も出版させていただいているのですが、その本に書けなかったことも含めて、ざっくばらんに話させていただきます。かつ、皆様に少しでも何かを感じていただけるような、そんな1時間にできればと思っています。

私は、最低1か月に1回以上はテレビの取材を取れるように意識し、そういう目的の元、週一のペースで国土交通省の記者クラブに通うようになりました。そこから機会があって木のストローを開発することになり、私自身が会える人や機会がいろいろと変化し、今に至るということです。

■広報の仕事

私が一番大切にしているのは、広報という立場なので、広報は社会の窓口だということです。記者の方は毎日世の中の情報を取材されていて、そういう方と自分は毎日情報交換するので、今の世の中にとって何が問題で、どういうことが求められているかということ、会社が今後どういったことをPR



したり発信していきたいか、ということを広報が間をとってやっていくことでいろいろな取材が成り立っていくと考えています。

昨年10月、アキュラホームとして埼玉に8階建ての本社を木造で建てる、ということを発表したいと言われたときに、時代の流れとして環境に対してどれだけ貢献できる建物なのかとか、木造の建物を建てる意義はどういったところにあるのか、それが社会にとってどのような効果をもたらすのか、といったことを会社と社会の間をうまく取り持って発表することで、いろいろな取材が成り立っていくのではないかと思います。広報活動を続けさせていただいています。

■木のストロー開発の発端

広報に配属になったとき、どのように取材を取ってくればよいか全くわからなかったのですが、最初は人間関係の構築から始めました。

2018年8月のことですが、国土交通省の記者クラブのある記者から私の携帯に電話がかかってきました。その内容というのは、西日本豪雨が発生した直後に、現地の被災者を取材



したときのことなのですが、被災者が「これは天災で甚大な被害が出ているが、一方でこれは人災なんだ」という話をされたそうです。何が人災なのかというと、山の管理が適切になされていなかったために土砂災害が甚大化してしまったということで、そのことを地元の方もその記者も問題視し、間伐材をなんとか有効活用できないかという相談の電話だったのです。

広報担当として、記者は住宅営業におけるお客様に当たると思っていましたので、なるべくその相談に精一杯応えたいという思いから、間伐材の有効活用についてその記者と話すようになりました。

森には、同じ時期に植えても太い木や細い木があり、その細い木を間引いて雨が降ったときに森がきちんとスポンジのように水を吸収するような水循環機能を果たす、そういう森林管理をしていかなければならないという問題を認識しました。

間伐材をなんとか有効活用できないかというときに、同じく問題になっていたのが海洋のプラスチックごみ問題です。亀の鼻にプラスチックストローが刺さっているような映像がたくさん報道され、ホテルや飲食店で次々にプラスチックストローを廃止するというニュースが毎日のように流されていたのがこの時期でした。

それで、この森林問題と海の問題を掛け合わせて、木のストローを作れないかと考えました。

■木のストロー開発ストーリー

木のストローを作るにあたり、もちろん会社にも言いました。住宅会社として新しい商品のこと、会社の活動を広報するのはもちろん大切なことなのですが、これからの時代、環境という大きなテーマは、どんな企業でもどんな組織でも取り組んでいかなければならないということが、これに取り組むときにわかりましたし、逆にこうした問題に取り組んでいない企業というのは淘汰されていくのではないかと、ということも

記者とコミュニケーションする中で実感しました。何事も持続可能な事業活動をすることが一番で、アキュラホームは木造住宅を提供しているのだから、木を使うだけではなく、木を活かしたり守ったり、時にはそういった環境について活動することが重要なのではないかとということで社内を説得するのですが、これがなかなか大変でした。どう考えても住宅会社が木のストローを作れるかどうかはわからなかったし、広報も2～3人体制なのでそんな余裕があるのかと言われると、今考えると反対されて当然だと思うのですが、相当様々なことを社内で闘うことになります。そうはいつでもできる場所までやってみようと思い、業務時間外になるのですが、当時家を建ててくれていた仲のいい大工さんに電話して、ストローなのでなんとかして木に穴を開けてほしいとか、どうしたら木のストローを作れるか、といったことを少しずつ相談するようになりました。しかしこれが全然うまくいかず、ストローの長さは約20～21センチあるのですが、間伐材は細く弱く節があり、そもそも使われていない材料なのでその木に21センチも穴を貫通させることが思った以上に難しかったのです。



一番左側が試作品第1号、真ん中が第2号です。第1号の周りを削ったのが第2号です。ただくり抜かれた木のストローを作るだけでも相当な手間がかかり、全然現実的ではないというのが、当時の感想です。一番右が、鉛筆の作り方のように、合わせるとストローになるように切込みが入っていて、うまく合わせられるようになっています。このストローは、スライドして内部が洗えるようになっています。当時やり取りしていた記者の方にこの試作品を見もらったのですが、そこで記者の方から「これじゃ木のストローを作っても意味がないよね」と言われたことで私の考えが変わりました。最初は言われたことの意味がわからなかったのですが、これだとみんなが使いたいと思うストローではなく、手間もすぐかかるわけです。本来木のストローを作ろうと思った理由が、海の問題と山の問題を解決したいということで、そういうきっかけになるア

アイテムにするためには、この木のストロー自身がいろいろな人に使われ、適切に捨てられるという循環するビジネスモデルを構築しないとやる意味がない、と思いました。そこからさらに社内を説得するハードルが個人的には高くなりました。それまでのどうにか 10 本ほど作って取材を取れたらという安易な考えから、循環するビジネスモデルを木のストローで構築し、さらにどこかで導入してもらいお金を支払ってもらって、と考えると、それはとても高いハードルになるな、とその時が一番辛かったかもしれません。循環するビジネスモデルをいろいろな方に使ってもらうにはどうしたらいいか、ということも考え始めました。そうするとマイストローのようなものよりも、使い捨てのプラスチックストローに近い形のを木で作ればいいのかという発想にだんだん切り替わっていきました。そして“今日役員にOKをもらわないとできない”という日を心に決めて、その日に役員が「社長に言うてみる」ということで社長にお話しいただきOKをいただきました。ただ会社でやってもよいと言われたのは開発まで。“できるかどうか分からないけど開発まではやってみなさい”ということでOKをいただき、広報活動はこれまでどおりに行うという約束の元、始めました。アキュラホームは社長がもともと大工出身で、CMでもカンナ社長と言われています。入社式で毎年カンナを削るのが名物行事ようになっていて、そのカンナ削りを見たときに、削った木はすぐに裂けて弱いものなのですが、これが木のストローの材料にできたら、間伐材が弱いという性質や細く節があってもうまくいくのではないかと閃いたのと、社長が一番大切にしているカンナ削りからできているもの、カンナ削りという弊社のPRにもつながるのではないかと思います、それ以来穴をあけたり溝を彫ったりするのをやめて、どうにか木の薄いスライス材をストローに替えられないかということで、またいろいろな企業の方たちに聞き回る日が続きました。最終的には、だいたい4～6mmの口径のストローを薄いスライス材を巻いて作ったらどのような大きさになるか、どう

いう角度で巻いたら一番強くなるか、どういう糊で接着すればいいか、物理的にどう切り口にすればいいか、といったことについて、住宅設計の建築士や自分の出身大学、町工場等、いろいろな方の協力をいただきながら3か月ぐらい試行錯誤して、今の形の木のストローが完成しました。



木のストローが完成する前の試作の段階で、溜池山王のザ・キャピトルホテル東急が「ぜひできあがったら採用したい」と言ってくださり、ホテルで採用するための監修も途中からしていただきました。

2018年8月からスタートして2018年12月にザ・キャピトルホテル東急と環境ジャーナリストの方、アキュラホームの三者で記者発表会を行いました。できあがったものや、それまでの開発に私たちの想いが相当詰まっていたので、世界で初めてこういうものができあがった、そしてその背景には廃プラのことや森林のことなどがある、ということをしつかりとメディアに伝えたくて、このような記者発表という形をとりました。

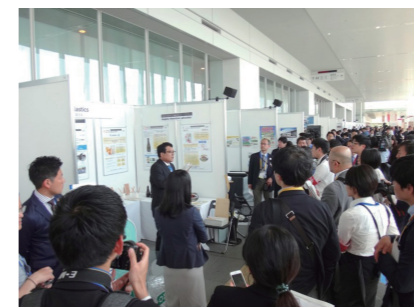
だいたい半年で150回ぐらい取材を受けるくらい、今までの会社の中では一番反響が多かった記者発表となりました。結果的には木を0.15mm くらいの薄さにスライスしたもの



を10～30°の角度で巻いたものを21cmの長さでカットして作られています。それ以上に薄くすると、機械では削れないので、機械で削れる最薄である0.15mmで決めました。

■木のストローを知っていただくために

メディアに出ていくと、いろいろな人が見ているということを感じたのがG20でした。日経新聞は政治家の方も読んでるので、その紙面を見た環境大臣などが、興味を持って会社を訪問していただけるようになりました。当時の環境大臣政務官だった勝保議員が会社に来てくださり、木のストローに興味をもってくださったことで、2019年に日本で初めて開催されたG20で木のストローが使えるように動いてくださいました。大阪サミットはもちろん、その前の環境大臣会合や新潟県で行われた農林水産大臣会合などで展示してもらったりメディアに説明してもらったり、コーヒープレイクや夕食会で使ってもらったりしました。



G20のメインテーマが廃プラだったので、そういった会議ではプラスチック製品は徹底的に排除されていました。なのでストローを出すことはもちろん、プラスチックストローを出すことはできなかったため、木のストローをだいたい7000本ぐらい使っていただきました。

■普及からビジネスモデルの構築へ

G20のときにはアキュラホームで製造したのですが、1社で作るほど持続可能性の低いものはない、ということをとて実感しました。アキュラホームがストローを作らなくても世の中に広がっていくモデルをきちんと構築しなければならない、ということを感じて、その考えに一番早く賛同してくれたのがSDGs 未来都市のひとつである横浜市でした。横浜市と話しをしたときに、市が持っている木で、市内の身障者の方が巻いて木のストローの形にして、市内のホテルで使う地産地消モデルといったものができたらいいよね、という話しになりました。記者の方と話す中で、もし障害者の方にストローの製造部分を担ってもらえれば雇用にも結びつき、当時厚労省で起こった障害者水増し問題などにも対応でき解決できるのではないかと考えていました。

横浜市は木があるイメージではないのですが、実は水源林が山梨県道志村にあって、道志村の間伐材を地元の森林組合の

方に0.15mmにスライスしてもらいました。それを横浜市内の身障者の方が手作業で巻いて、それをペイシェラトンホテルに導入してもらっています。また横浜市でも積極的に取り組んでもらっています。これが地産地消モデルで、2019年11月に横浜市と一緒に発表しました。

このモデルは行政だけでなく、企業にも応用できるのではないかと考えました。アキュラホームも企業なので障害者の雇用もしていたのですが、農作業など会社の業務とは直接関係のない作業をしてもらっていました。

木のストローができたら、その作業を自社の障害者の方にもお願いしたりしていました。これの何がいいかというと、障害者の方も木のストローを作って、木のストローが会社で使われたり、会社をPRするものとして使われることが、とてもやりがいを感じるという声を多く聞きました。

地産地消と雇用創出の実現へ

地域生産

地元の間伐材を活用

障がい者の方がストローを製作

地域消費

障がい者・高齢者の
方々の雇用を創出

SABM アキュラホームグループ

横浜市のときも市内の身障者の方が作り、身障者や高齢者の方が実際にペイシェラトンホテルに飲みに行ったりした話とか、G20で使われることがやりがいになっているという話しも結構多かったため、そういう企業モデルとして使っていけないかなと考えていたときに、JR 東日本から一緒にSDGsに取り組みたいという話しがありました。

はじめはグランクラスという高級シートで木のストローを導入したいという話しだったのですが、手作業で作る数も限られているし、導入するだけでSDGsに取り組んでいるというものかどうか考えることもあり、それなら自
びつけながらグランクラスで採用したらいいのではないかと、現在、JR 東日本のグリーンパートナーズという子会社で作ったものを東北・北海道新幹線と北陸新幹線のグランクラスで採用されています。



■開発の裏側のストーリーを伝える

このように木のストローに取り組んだり、いろいろな方とお話しさせていただき、SDGs という言葉もとても後押しになりました。今では皆さんバッジを付けたり、いろいろと取り組まれている企業も多いと思うのですが、木のストローもいろいろな項目に貢献しています。

木のストローを通して



今まで木のストローをどのように世の中に普及させていくとか、どのように品質を良くするかとか、どのように導入したり地産地消モデルを採用してもらうかということ必死に考えながら2年間やってきたのですが、コロナ感染が拡大したときに、さすがに障害者や高齢者の方に一か所に集まって作業してもらうことも怖かったので、会社の指令ですべてストップしました。どの企業も最優先目的はコロナ対策になったと思いますが弊社もそうになりました。

そのときに私もマスコミの方と夜のコミュニケーションをとることができなくなり、少し時間ができたときに、本を書いたらどうかというお話をフジテレビのグループ会社の扶桑社からいただきました。「少し余裕ができたのなら、今まで自分がやってきたことを記録してみなさい」と言われ、携帯で撮影した写真や記録を見返しながら、西日本豪雨が起きたときからコロナになるまでの間、どのように自分が動いてきたかということ、〇月〇日に何をした、という形でメモしました。

約2年間で120項目ぐらい出てきて、それをフジテレビの記者に送ったところ、扶桑社が書籍化したいということでオファーをいただき、3か月ぐらいで作りました。なぜ住宅会社がストローを作ったのか？ということで、ノンフィクションで実名実企業で書かれています。この本を出してからは、木のストローをどのように普及させていくかという頭から、この木のストローの裏側で一企業一企業がどう動いて、どういう世界が広がっていったかというストーリーを伝えることもとても大切な、と思うようになりました。



■書籍「木のストロー」の概要

- ・発売日 2020年10月16日(金)
- ・著者 アクチュアホーム 西口彩乃
- ・出版社 扶桑社
- ・価格 1,400円(税抜)
- ・丸善丸の内本店 ランキング1位獲得

アクチュアホームという会社も木のストローに取り組む前は、恥ずかしながら誰一人SDGsについて知りませんでしたし、環境に取り組んではいるものの、その意義や意味を正しく理解している社員は本当に少なかったです。私自身もそうでしたが、木のストローを開発して、しばらくは「なぜ木のストロー？」という声もあったのですが、世の中で話題になったりホテルで採用されたり、誰もが知っている会議で導入されたりして、そういう価値を徐々に社員もわかるようになってきて、今では住宅展示場の営業マンも木のストローの話を通じてSDGsの話しをできるように変わってきていますし、木造住宅を販売すること自体が環境にどのように繋がるかというトークもされているようなので、企業の中でも結構変わってきたのではないかと、と思っています。

教育教材としても木のストローのストーリーがいろいろところで採用されています。小学校5年生で林業について学んだり、SDGsについては早い学校だと2年生から習うのですが、小学校や中・高・大、大学は母校の立命館大学と青山学院大学で外部講師をさせていただいています。そういう学校で木のストローを題材として講義したり、企業でも新規事業やスタートアップ、SDGs推進を始めたばかりで講演の依頼をいただいたり、そういう教材としても使っていただいています。



この木のストローは、良くも悪くも巻くところが手作業なのです。機械化については、まだ少し時間がかかりそうですが、手作業で作れることをメリットとして捉えてもらえるのが教育教材で、小学校の授業45分間のうち、はじめの15分ぐらいで海の問題と山の問題の話をして、そこから木のストローを実際に子供たちに作ってもらおうといった授業をやらせてもらっています。講演会にも呼んでいただいたりして一人でも多くの方に木のストローを知ってもらうだけでも嬉しいので、何かあればいつでも言っていたいただければと思っています。

これは今まさに開催されているドバイ万博の日本館のリーフレットで、次の万博は2025年に大阪万博があるのですが、その一つ前の万博として今まさにドバイで開催されています。



190か国以上が出演していて、オミクロンの関係で1年延期になって今年の3月末まで開催されています。その中で、日本館のVIPのお土産として木のストローが選ばれました。日本からは17個が選定されていて、南部鉄器や江戸切子など長い歴史のある物の中で、開発されて2、3年のものを選ばれたということは異例ということですが、なぜ選ばれたかという、万博のメインテーマが3つあって、1つめがサステナビリティ、2つめがモビリティ、3つめがオポチュニティで、そのうちサステナビリティは何をするにも欠かせないテーマになってくると思います。そのサステナビリティに日本の技術が詰まったものとしてわかりやすいということで採用されたと聞いています。

今年の1月、2年ぶりに出身地の生駒市に帰ったのですが、市長が環境省から来られた方で、本を読んでくださり何か一緒にできないか、ということで、今年の1月から「いこまSDGsアンバサダー」をやらせてもらっています。まだ何もできていないのですが、地元に対しても木のストローを通じてSDGsの実践者として貢献できることがあれば、アクチュアホームの広報という立場ですが、できればいいなと思っています。

SDGs未来都市 生駒市のいこまSDGsアンバサダーに



本を書いたときから絶対に実現したい私の目標はこの本をドラマか映画にして、より多くの人に木のストローのストーリーを知ってもらいたいというものでした。それを2020年の秋からずっと動いていて、ようやくフジテレビでドラマ化できることに決まりました。フジテレビ側もSDGsの取り組みの一つとして放送します。フジテレビのホームページに特設ページができ、一週間ごとにいろいろな情報が更新されています。先週はサンスポの記事でも話題にしてくださり、2週間後の2月21日に、緊急事態宣言が発出されたら中止になるのですが、制作発表会兼記者発表会、試写会も予定されていて、ここで2月26日より多くの方に観ていただけるような広報の仕掛けができたらいいな、と、考えています。

■木のストローが生み出したもの

先週まではほぼ毎週のように土日は撮影でした。ドラマの撮影は本当に過酷で、朝5時半集合とかかなり大変だったので何とか撮り終えました。このドラマは会社への恩返しという気持ちもあり、木のストローのドラマというよりも、このドラマを観た人にアクチュアホームのことを知ってもらったり、エキストラでいろいろな社員が参加したり、撮影場所も実際の展示場や本社を使ったりしてなるべく社員を巻き込みながらドラマの制作をしました。木のストローに取り組んだことで、まさかドラマができるとは思っていませんでしたし、本当にいろいろな人に来て、いろいろな世界を見せてくれました。同時に、なぜここまで実現できたかということ、これからの時代「環境」が非常に大きなテーマになってくることは間違いなく、それを無視した事業活動はできない、と強く感じました。今日の講演でも、木のストローを通して、木のストローのことというより、これを機会にいろいろな環境について考えるきっかけとしていただけたら嬉しいなと思っています。

特別に何か資格を持っているわけでも特別な能力があるわけでもない普通の社員ですが、いろいろな方の力を借りることで、その人自身がお金になるかわからないかわからなくても、その人が一生懸命その人のできる範囲の中で協力してくれるということが、ものごとを始めるにはとても大切な、ということを感じています。木のストローの裏側で一人の広報担当と住宅会社がチャレンジしてきたこと、そういうストーリーがあったということを知っていただき、これから何かチャレンジしたり、何か皆さんの背中を押せるきっかけになれば、私たちもとても嬉しいなと思っています。

最後まで聞いていただき、ありがとうございました。(終)